**男大迹天皇**（継体天皇）**末期に至る任那について**岩倉紙芝居館　上田啓之
 **任那からの来訪**
　任那が最初に日本（やまと）書紀（以下「紀」）に現れるのは、御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）六十五年（BC33）条（[書紀巻5](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki14.htm#%E5%85%AD%E5%8D%81%E4%BA%94%E5%B9%B4%E7%A7%8B%E4%B8%83%E6%9C%88)）1であった。任那国の蘇那曷叱知が朝貢して来た。
　活目入彦五十狹茅天皇（垂仁天皇）二年（BC28）是歳条（[書紀巻6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#%E4%BA%8C%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%BA%8C%E6%9C%88)）2によれば、一書に、越国の笥飯浦に意富加羅国の王子で都怒我阿羅斯等、亦名は于斯岐阿利叱智干岐と云い、日本（やまと）に帰化した。
　同年是歳条（[書紀巻6](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#%E4%BA%8C%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%BA%8C%E6%9C%88)）3によれば、任那人の蘇那曷叱知はこの年に帰国したとし、その時御間城入彦五十瓊殖天皇の名をとり、本国を弥摩那国（みまなのくに）と号（なづ）けせしめたとした4。
　任那の蘇那曷叱知は5年後に帰国したが、一書では、意富は尊称で、加羅国の王子が帰化したという。

|  |
| --- |
| 1、任那国（みまなのくに）、蘇那曷叱知（そなかしち）を遣（まだ）して、朝貢（みつきたてまつ）らしむ。任那は、筑紫国を去ること二千餘里。北、海を阻（へだ）て以て鷄林（しらき）の西南（ひつじさるのすみ）に在り。2、一（ある）に云（い）はく、御間城天皇（みまきのすめらみこと）の世（みよ）に、額（ぬか）に角有（つのお）ひたる人（ひと）、一（ひとつ）の船に乗りて越国（こしのくに）の笥飯浦（けひのうら）に泊（とま）れり。故（かれ）、其処（そこ）を号（なづ）けて角鹿（つぬが）と曰ふ。問ひて曰はく、『何（いづれ）の国の人ぞ』といふ。対（こた）へて曰（まう）さく、『意富加羅国（おほからのくに）の王（こきし）の子、名は都怒我阿羅斯等（つぬがあらひと）。亦の名は、于斯岐阿利叱智干岐（うしきありしちかんき）と曰ふ。伝（つて）に日本国（やまとのくに）に聖皇（ひじりのきみ）有（ま）すと聞（うけたまは）りて、帰化（まうおもぶ）く』。3、是歳（ことし）、任那人（みまなびと）、蘇那曷叱智（そなかしち）請（もう）さく、『国に帰（まかりかへ）りなむ』とまうす。4是（ここ）を以て汝（いまし）が本国（もとのくに）の名を改（あらた）めて、追（お）ひて御間城天皇（みまきのすめらみこと）の御名（みな）を負（と）りて、便（すなは）ち汝が国名にせよ」とのたまふ。仍りて赤織（あかおり）の絹を以て阿羅斯等に給（たま）ひて、本土（もとつくに）に返しつかはす。故、其の国を号（なづ）けて弥摩那国（みまなのくに）と謂（い）ふは、其れ是の縁（ことのもと）なり（同是歳条一云）。 |

　「紀」の編者達がここに「任那」を登場させたことについては、注によれば、「国内問題の飛躍的発展の時代たる崇神朝が同時に対外関係発展の端緒の時代でもあったことを示すのではないか」とある。
　このことを考えるに、編者達の時代をみる必要がある。「紀」の編纂は天渟中原瀛眞人天皇（天武天皇）十年（681）三月条（[書紀巻29](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki53.htm#%E5%8D%81%E5%B9%B4%E6%98%A5%E6%AD%A3%E6%9C%88)）に始まっている。天命開別天皇（あめみことひらかすわけのすめらみこと；天智天皇）は
天命を開く、天命により蘇我氏の政権を打倒したという中国の革命風の命名となっている。百済救済に動き、新羅と唐の連合軍に完敗したことに加え、亡命百済官人を多数登用し、中国風官僚システムが近江に持ち込まれ、倭（やまと；奈良盆地）伝来の統治システムに混乱が生じていた。
　また天智天皇が皇位を大友皇子に継がせようしたことで、大海人皇子との確執が生じ、豪族にあっても親子、兄弟によりいづれに就くか別れての乱となり、大海人皇子が勝利し、天渟中原瀛眞人天皇（あまのぬなはらおきのまひとのすめらみこと）の即位となった。
　瀛（おき）は蓬莱（ほうらい）、方丈（ほうじょう）と並ぶ空想上の東方、海の彼方の神仙三山の一つであり、そこには金銀の仙宮があり、不老の仙薬があり、その仙薬を授ける仙人が住む所である。仙は僊「飛揚升高」から来ており僊人は天に昇る人を意味した。眞人は、荘子、[大宗師篇](https://ja.wikisource.org/wiki/%E8%8D%98%E5%AD%90/%E5%A4%A7%E5%AE%97%E5%B8%AB)に論じられ、四季が廻るがまま枯れては蘇るがごとく、無為自然にして死しては生れる人、道教では、当初は「老子」を想定していたが、後には宇宙の根源神の仙宮で仕える最高位の神仙とされた。天の渟中原にある瀛の仙宮の眞人である天皇という意味であり、飛鳥（あすか）淨御原（きよみはら）宮で、現神（あきつかみ）の天皇（すめらみこと）とされた。
　中国では、天皇は天皇、地皇、人皇の天皇とも、北辰を中心として天地の秩序をたてる天皇大帝ともされ、天子とは天帝の子の意味である。古くは、天帝の子が地を治めるという伝統があった。
　天武天皇は、天孫降臨神話を前面に掲げ、皇孫を中核とする秩序形成を構想し、豪族を、皇孫に連なるもの（後の皇別）、その他国内豪族（後の神別）、帰化した豪族（後の諸蕃）に分け、官職を再編し、一；真人、二；朝臣、三；宿禰、四；忌寸、五；道師、六；臣、七；連、八；稻置とした。
　中国の書にある倭（わ）、奴国、卑弥呼、倭の五王等が後漢や魏や晋や宋に朝貢して王とされた歴史を削ることが図られた。天孫降臨、万世一系の皇孫の国とし、十代御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）の御代になり国内が平定されると、倭（やまと）でない日本（やまと）に聖皇（ひじりのきみ）有りときこえるようになり、半島の国の王子が帰化を求めて来訪した、その始まりであったと主張したのであろう。

　その時期が崇神天皇六十五年戊子（[表](../%E5%B2%A9%E5%80%89%E7%B4%99%E8%8A%9D%E5%B1%85/koten/images/kanshi.pdf)）となることに無理があった。西暦の紀元前33年という直線的な時系列の意識はなく、循環する干支であり、暦博士以外には戊子に何巡の差があるかは意識できないものである。
　「紀」においては、暦博士は干支を駆使し、任那からの来訪を、西暦でみれば、紀元前33年に、加羅国の王子の来訪を紀元前28年に設定したことになる（任那と加羅を混同している）。この時期は、歴史的には、馬韓（52ヶ国）、辰韓（12ヶ国）、弁韓（12ヶ国）の時代であった。三国志、魏書三十 烏丸鮮卑東夷伝（[維基文庫](https://zh.wikisource.org/wiki/%E4%B8%89%E5%9C%8B%E5%BF%97/%E5%8D%B730?uselang=ja)）に、「弁、辰韓合せて二十四ヶ國、大國は四五千家、小國は六七百家、總て四五萬戶。其の十二國は辰王に屬す」、「國に鐵出ず、韓、濊（わい）、倭（わ）皆從（よ）りて之を取る。諸の巿買に皆鐵を用ひ、中國が錢を用ふが如し、又以て二郡に供給す」と記されている。新羅、高句麗、百済となる以前の世界、弁韓の地は洛東江の川筋に当り、大略、流れ込む支流により地域が分かたれた（[古地図](../%E5%B2%A9%E5%80%89%E7%B4%99%E8%8A%9D%E5%B1%85/koten/images/mapkochosen.pdf)）。
　弁韓12ヶ国とは、弁辰彌離彌凍国、弁辰接塗国、弁辰古資彌凍国、弁辰古淳是国、弁辰半路国、弁辰楽奴国、弁辰彌烏邪馬国、弁辰甘路国、弁辰狗邪国、弁辰走漕馬国、弁辰安邪国、弁辰瀆盧国とあり、金海の弁辰狗邪国から駕洛国が建国されたとみられている（駕洛と加羅は別）。一然（1206 - 1289年）による三国遺事、駕洛国記（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/991990/1/32)）によれば、駕洛国の建国は後漢光武帝の建武18（壬寅AD42）年とされており、任那が現れるのは更に先のこととなる。「紀」は任那と名付ける以前の国からの来訪と工夫をしているが、仮に弁韓の国からの来訪としても、列島では歴史的には奴国以前の倭であり、紀元前33年には御間城入彦五十瓊殖天皇も磯城の瑞籬宮も存在しない（[書紀巻5](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki13.htm#%E4%B8%89%E5%B9%B4%E7%A7%8B%E4%B9%9D%E6%9C%88)）。
　紀元前33年に建国されているとするならば、新羅があてはまる。金富軾（1075 - 1151年）による三国史記新羅本紀第一（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/9)）によれば、前漢孝宣帝の五鳳甲子（BC57）年に新羅の前身である徐那伐（じょなばつ）が建国されたとしている。「紀」では、紀元前27年、垂仁天皇三年に新羅の王子、天日槍が来訪したとしている5。しかし、その時に奈良盆地に倭政権が存在しないことに変わりない。

|  |
| --- |
| 5活目入彦五十狹茅天皇　垂仁天皇三年春、三月(BC27.03)条新羅（しらき）の王（こきし）の子、天日槍（あめのひほこ）来帰（まうけ）り。･･･初（はじ）め天日槍、艇（はしぶね）に乗りて播磨国（はりまのくに）に泊（とま）りて、宍粟邑（しきはのむら）に在（あ）り。･･･「僕（やつかれ）は新羅国（しらきのくに）の主（こきし）の子（こ）なり。然（しか）れども日本国（やまとのくに）に聖皇（ひじりのきみ）有（ま）すと聞（うけたまは）りて、則ち己が国を以て、弟（おとと）、知古（ちこ）に授（さづ）けて化帰（まうけ）り」とまうす。 |

　また、任那国の蘇那曷叱知が如何なる書により引用されたかも不明である。可能性としては、百済三書、「百済本記」、「百済記」、「百済新撰」であるが「紀」に逸文が遺されているにすぎず、確認をすることはできない。
　この三書は百済の近肖古王の時（346-375年）、高興等の漢人により記述されることに始まるとされ、漢文化の波及により、漢人を登用し国史を記すことが始まった事による。百済と倭（やまと）が新羅と唐により白村江の戦いで敗れ、倭に亡命した大量の百済の官人と共に三書が持らされ、「紀」の編者達が利用することになった。「紀」に引用された記述が原著のままであるか、潤色されたものであるか議論があり、門外漢には如何ともしがたい。任那のあり方も一様でなく、倭と百済とでも見方が異なり、その関係も時代によって異なり、お互いその主張に合致する事象のみを取り上げることになる。
　「紀」天國排開廣庭天皇（欽明天皇）五年（544）十一月条に、百済「聖明王謂りて曰く、『任那の國と吾が百濟と、古より以來（このかた）、子とも弟ともあらむことを約（むす）べり・・・』」とある。これによれば、任那は百済の子あるいは弟であり、時により日本（やまと）の主張とは合致しないことが分かる。

**半島と列島**　脱解、瓠公、許黄玉
　半島側に「脱解」の記録がある。「脱解」とは倭方面の遠くから来た者で新羅の王となった人物である。新羅本紀二代南解次次雄五年条（AD8年；国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/11)）に「王は脱解の賢を聞き、長女の妻とし」、同七年条で「脱解を以て大輔と為し、軍と国政の事を委ねた」とある。三代儒理尼師今は人望ある脱解に王位を譲ろうとしたが、脱解は儒理尼師今を立て、その後四代脱解尼師今（57～80年；国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/12)）として王に就いたとある。
　これは三国史記の主張であり、高寛敏氏の「『三国史記』新羅関係記事の検討、[HP](https://cir.nii.ac.jp/crid/1050851707424116608)」によれば、600年に記されている新羅の「国史」では脱解は詭計を用いて梁部の月城を奪い、名実共に新羅王となり、新しく「尼師今」を称したとあり、王位簒奪者となる。更に、神文王（在位681-692）時代に完成したとされる「新国史」においては、脱解は、それまで考えられていた朴氏でなく昔氏とされたとあり、最初は金官国に着いたが、受け入れられず、「始祖赫居世在位三十九年」に辰韓に漂着し、「南解王五年」にその婿になったとしており、三国史記は「国史」や「新国史」の見解を改変したことになる。
　この脱解については、三国史記（脱解尼師今；国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/12)）では、倭国の東北一千里の多婆那（たばな）国（但馬国、肥後国玉名郡、海神の竜宮国等の説あり）の王妃が「卵」を産んだという。不吉とされ、卵を箱に入れて流したという（新羅の赫居王も卵生、卵が瓢のようで瓢を朴と云ったので朴氏としている。駕洛の首露も卵生、金の卵で金氏としており、共に吉祥とされた）。金官国に漂着したが手にする者がなく、更に辰韓の阿珍浦についた時、老母（赫居王の母）が箱を開き中の男児を育て、身長九尺、神のように秀朗、知識は人に過ぎる人物となった。漂着したとき一羽の鵲（かささぎ）が従ってきたので鵲を省略して昔氏とし、箱から出したので脱解と名付けたという。彼は、学問に専念し地理にも明るく、以下にみる瓠公（ここう）の地を望みて吉兆の地とし、騙して取り上げた。南解王は彼を賢人として女（むすめ）を妻としたとある。王に相応しくするための修飾が目立つ。
　三国遺事第四脱解王（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/991989/1/52)）では、老婆は阿珍義先と云い赫居王の海尺（海運／漁業者）の母、漂着した船に鵲が集っているのを怪しみ、船を探索すると櫝（はこ）があり、天に祈願して櫝を開くと、中から男子あらわれ、「龍城國人（亦云正明國。或云琓夏國、琓夏、或作花廈國。龍城在倭東北一千里）」であると云った。龍城国は胎生の二十八龍王を元祖とする国であり、父は含達婆（未詳）、母は積女國（未詳）王の女（むすめ）、子がなく祈願したところ卵を産んだ。それは吉祥ではないと櫝に入れ、七宝や奴婢と一緒に船に載せ流したものが漂着した。その子が成人し、吐含山に登り居住地を求めると三日月のような霊峰があり、それはかの瓠公の宅の地であった。一計を案じ、その側に砥石と炭を埋め、自分は昔治匠（鍛冶）であったが隣郷に出た間に取られたと訴訟を起し、隣地を掘れば分かるとして瓠公の地をせしめたとある。南解王は彼を智者として長の公主（娘）を妻にした。集った鵲にちなみ鳥をはずして昔氏とした、櫝を解いて卵から脱したことから脱解とも云う、とあり、かなり様相が異なる（[三国遺事訳注八](../%E8%B3%87%E6%96%99/%E4%B8%89%E5%9B%BD%E9%81%BA%E4%BA%8B%E8%A8%B3%E6%B3%A8%E5%85%AB.pdf)）。
　出典が分からないが民間伝説、『阿珍浦伝説；古代史俯瞰 by tokyoblog　[HP](https://tokyox.sakura.ne.jp/wordpress/post-90/)』によれば、阿珍義先は「王に魚を献上する役目の漁師の母」とあり、当時は詐欺師の脱解が知恵者と称される時代であったという。脱解は27代目の王（善徳王；在位632～647年）の夢に現れ、「遺骨を掘り起こし塑像し吐含山に安置」することを求め、東岳神として祭祀されたともある（脱解は吐解とも記され吐含山に因むとする説もある）。上記の「新国史」編纂時代の伝承と推察できよう。

　先にみた瓠公は、新羅建国の時に、三韓で影響力を行使していた馬韓の辰王と互角に交渉を行った赫居王の倭人の臣と記されている。新羅本紀では、初代新羅王の赫居世居西干三十八年条（BC20年）に、「瓠公はその族姓未詳、本は倭人」とある。倭人は半島に由来する者、列島に由来する者があり、族姓未詳とありいづれとも定め難いが、これは瓠公一人のこととは思われず、列島の海岸部とで双方の往来があった。烏丸鮮卑東夷伝に、「國に鐵出ず、韓、濊（わい）、倭（わ）皆從（よ）りて之を取る。諸の巿買に皆鐵を用ひ、中國が錢を用ふが如し、又以て二郡に供給す」とあるごとく、彼等は鉄で決済する交易に携わっており、相互に競って楽浪郡を通じて漢へも朝貢していた。
　『後漢書』光武帝紀第一に、「中元二年（57年）春正月、東夷の倭奴国王が使いを遣はし貢献す」また、東夷列傳第七十五に、「建武中元二年（57年）、倭奴国は貢物を奉り朝賀す。使人自ら大夫と称す。（倭奴国は）倭国の極南界である。光武帝は印綬を賜ふ。また、安帝の永初元年（107年）、倭国王帥升ら生口百六十人を献り、見を請ひ願ふ」とある。倭奴国あるいは倭国が、後漢から王と認められるには、それなりの朝貢使節を送り、産物を奉納してのことであろうし、楽浪郡の官吏からもそれなりの待遇を得ていたと思われる。それには駕洛国との協力関係を必要としたのであろう。
　三国遺事、駕洛国記（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/991990/1/35)）によれば、初代の首露（スロ）王に嫁いだのが阿踰陀（アユタ）国の許黄玉（ホファンオク）とあり、駕洛はインド系の交易者と姻戚関係を結んでいた。許黄玉王妃陵（[復命書](http://www.indranet.jp/products/archiv/080328-31FW.pdf)；岡田真美子、兵庫県立大学環境人間学部）があり、韓国遺伝体学会がその墓の子孫の遺骨のＤＮＡ鑑定を行った所、モンゴル系でなくインド系と確認されたという。金海市とインドのアヨーディヤー市はこの件で姉妹提携を結んでおり、双方でそれに基づいた祭祀や文化活動が行われている（Ayodhya；[Posha](https://www.lightgalactica.com/post/ayodhya)）。Ayodhyaは「打ち勝たれがたい」都の意で、古代コーサラ国の首都、叙事詩「ラーマーヤナ」のラーマ王子の故郷で、ネパールに近く、後の時代ならともかく、紀元前のその時代にそこから本当に船で来たのか疑問視され、タイの古都アユタヤ、インドネシアの古都ジョグジャカルタもアヨーディヤーの名に由来すると候補にあがり、また、月氏のごとく陸路で移住してきたものもあり、諸説あって定まらないようである。ただ、駕洛は航海、交易に長けた国であり、海人族抜きに想定することには難があろう。

　この許黄玉、脱解をめぐり、日本（やまと）にも関連伝承が記されている。九州国際大学の橋本昭雄氏の「豊日別宮古文書と古代豊国のキングメーカーの研究[HP](https://iss.ndl.go.jp/books/R000000004-I028488261-00)」では、許黄玉を「鹿春の神」、辛国息長大姫大目命（からくにおきながおおひめのおおめのみこと）として祭祀していたとみておられる。宇佐宮託宣集にある豊前國風土記の逸文に、「昔者 新羅國神 自度到來 住此河原 便、即 名曰鹿春神」がある。通例、昔（むかし）、新羅国の神、自ら度（わた）り到来し、この（宇佐の田河ノ郡）河原に住み、すなはち、名付けて「鹿春の神」というと訓じられている。

|  |  |
| --- | --- |
| 橋本氏は、昔は昔氏のこと、便即の「便」を古代新羅の解字法で「更と人」に分解し、「人を更（かえて）即（地位）におく」、自度を子道（父母に仕える）とし、「昔の者、新羅国神（王）なり、子道として親孝行するため自ら渡り 帰り来たる。昔氏は、原（始め）より、此に住む黄家の血筋なり。黄家は、即位を便（治）める、名付けて曰く、鹿春の神と」と解釈し、鹿春の神を辛国息長大姫大目命とみ、辛国を駕洛、大目命をインド系の大きな魅力ある目の命、駕洛の許黄玉としておられる。 | 若いインド人女性の肖像画に近い白い真珠と黄色の布で顔の部分を覆っています。明るいメイクアップ、長いまつげと入札の注意をそらす。 の写真素材・画像素材.  Image 91087772.123RF（[HP](https://jp.123rf.com/photo_91087772_%E8%8B%A5%E3%81%84%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E4%BA%BA%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%81%AE%E8%82%96%E5%83%8F%E7%94%BB%E3%81%AB%E8%BF%91%E3%81%84%E7%99%BD%E3%81%84%E7%9C%9F%E7%8F%A0%E3%81%A8%E9%BB%84%E8%89%B2%E3%81%AE%E5%B8%83%E3%81%A7%E9%A1%94%E3%81%AE%E9%83%A8%E5%88%86%E3%82%92%E8%A6%86%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82%E6%98%8E%E3%82%8B%E3%81%84%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%82%A2%E3%83%83%E3%83%97%E3%80%81%E9%95%B7%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%A4%E3%81%92%E3%81%A8%E5%85%A5%E6%9C%AD%E3%81%AE%E6%B3%A8%E6%84%8F%E3%82%92%E3%81%9D%E3%82%89%E3%81%99%E3%80%82.html)） |

　昔氏は先に見た脱解であり、新羅建国（紀元前）来の人物とされており、許黄玉は駕洛国建国時（紀元後）の王妃であり、これまでの検討からすれば、昔氏を黄家の血筋とするは時系列上逆転し成立しない。豊前國風土記は天武朝以降に編纂されたものであり、干支12運（720年）近い前のことであり、時系列が混同されていても不思議はない。新羅や駕洛の建国年ももっと時代が溯るとされており、実際の時系列については筆者の及ぶところではない。
　橋本氏は脱解の龍城國、正明國、琓夏國について、「正明」を解字法で「正月日（たつきひ）」＝龍城火（たつきひ）とし「火の国」＝肥国、琓夏を王完（治める）夏（大きな建物）＝龍城ですべて同じとしておられる。また、多婆那（tabana）≒(bのm変化)玉名(tamana)、龍城（たつしろ）≒八代（やつしろ）とみられ、脱解を「火の国出身の和人」と推定されている。
　更に同逸文では、郷の北の第一の峰の頂に沼があり、黄楊樹（つげ）が生え、龍骨（生薬；重鎮安心薬）が有り、第二の峰には銅、黄楊樹、龍骨があり、第三の峰にも龍骨が有るとしている。龍城國は元来龍王の国とあり、橋本氏はこれらを出雲の「ヤマタノオロチ」、阿蘇山、宝池の九頭龍神（九頭八面大龍）と関連付け、九頭龍から現れた大龍者に娑**伽羅**龍王、阿那婆達**多羅**龍王第三王子と伽羅、多羅を冠する名が含まれていることから、伝説が共有されているとみておられよう。ただ、これは欽明朝（539～571年）以降伝来の仏教の要素が混じっており、時系列に難があると思われる。
　黄楊、龍骨、銅については、新羅系で、仙薬に通じ、鍛冶をなし、霊力により災厄病気の原因を探り除去する術を施すシャーマンでもあった辛嶋（からしま）氏の伝承である。また、気息足姫（神功皇后）の三韓征伐で、新羅に侵攻し踏鞴津（たたらのつ）の製鉄の技術者を連れて帰還したという伝承も想起される。

**三国史記における倭人と新羅**（紀元200年以前）
　新羅本紀（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/4)）第一第一代、始祖赫居世居西干八年（BC50年）に、「倭人行兵す。邊を犯すを欲す。始祖神德有すを聞きて、乃ち還る」とある。第二代、南解次次雄十一年（AD14年）に、「倭人兵船百餘艘を遣し、海邊民戸を掠す。六部勁兵を發し以てこれを禦ぐ」とあり、兵船百余となれば、豪族の枠を越えた国の存在が前提となる。第四代、脱解尼師今三年（AD59年）には「倭国と国交を結び。互に使者を交換す」とあり、倭では奴国が該当することになる。この間新羅には高句麗や百済が出兵しており、倭側との緊張緩和を図ったのであろう。しかし、同十七年（73年）に、「 倭人、木出島を侵す。王、角干羽烏を遣し、これを禦ぐも克たず、羽烏死す」となる。第五代婆娑尼師今の時代には国力回復に努めるも、北辺の族、百済、加耶の侵攻、洪水と飢饉に病んでいる。第六代、祇摩尼師今十年（121年）にはそれに加え、「夏四月、倭人が東部辺境に侵入」し、十二年（123年）には、「 春三月、倭國と講和す」とあり、帥升らの朝貢の10数年後であり、恐らく倭は加羅と結び、楽浪郡を経て後漢との交易に携わっていたのであろう。新羅は、以降靺鞨（まっかつ）の侵入に対して、百済に救援を要請して防いでいる。

第八代　阿逹羅尼師今五年（158年）に「 春三月竹嶺を開く、倭人来聘す」とある。竹嶺が開放されれば、洛東江を溯り、小白（ソペク）山脈を越へて南漢江流域にでることができる。海上航路でない楽浪への道が開かれる。倭人を来聘するは、これを求め、靺鞨や百済の侵入に対抗する上で、新羅は倭と関係改善を要としたのであろう。同二十年（173年）には、「 夏五月 倭女王卑彌乎、使を遣し来聘す」とこれが更に進展する。後漢書に、「桓・霊帝の間、倭國大いに亂れ更に相攻伐し、歴年主無し」とあり、178年から183年、5年間倭國は主なしとされ、卑弥呼はその後に「共に一女子を立てて王」となった女王であり、三国史記の173年卑彌乎の使者来聘は、もっと後のことと思われる。
　後漢にあっては、桓帝、霊帝の末（146年－189年）には世が乱れ、黄巾の乱が発生し、半島における後漢の影響力は後退し、情勢は不穏となっていた。玄菟郡では高句麗との戦となり、建安年間（196年－220年）には、遼東郡の太守であった公孫氏が力を持ち、帯方郡を開き後漢の遺民を集め、兵を起こして、韓や倭を圧迫した。後漢との交易に携わっていた三韓諸国も倭国も、介入してくる公孫氏には頭を痛めた。公孫氏は漢の武帝により平定された衛氏朝鮮に相当する立場となった。
　景初二年(238年)となろうか、魏の明帝は密かに帶方太守に劉昕(りゅうきん)を、樂浪太守に鮮于嗣(せんうし)を定め、公孫氏の背後に送り込んだ。卑弥呼がこれに応じ、協力したのであろう、公孫淵が帯方郡を目指して逃げたが捕えられた。さような功があってこそ、魏は卑弥呼を親魏倭王に叙したのであろう（詳細は魏志倭人伝、[その2](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi2.htm)　[その3](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm)）。
　中国や半島の史書からすれば、そのような歴史が想定されるが、「記紀」にあってはそれらを無視した。崇神天皇、垂仁天皇時代の開国談、そして神功皇后三韓征伐談を挿入することとなった。

**神功皇后と応神天皇**
　気長足姫尊（神功皇后）の時代は、景初二年（238）卑弥呼が親魏倭王の金印を与へられた時代に設定されているが、半島での事象は干支二運（120年）、あるいはそれ以後のものである。
　気長足姫尊が「新羅の図籍（しるしへふみた）收（とりをさ）め（新羅の降伏）（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#%E5%86%AC%E5%8D%81%E6%9C%88%EF%BC%88%E3%81%8B%E3%82%80%E3%81%AA%E3%81%A5%E3%81%8D%EF%BC%89%E5%B7%B1%E4%BA%A5)）」、「質（むかはり）微叱許智伐旱（みしこちほつかん）」を連れ還ったのを仲哀天皇九年（200＝320）とした。百済は卓淳（とくじゅん）国を通じ倭との関係を結び、自主的に「西蕃（にしのとなり）と称（い）ひつつ、春秋（はるあき）に朝貢（みつぎたてまつ）[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#%E5%8D%85%E5%8D%81%E4%B9%9D%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%B8%89%E6%9C%88)」ることになったのを同49年（249＝369）としている。新羅の質を送還するに際し、新羅の策謀により質を奪還されたことで倭は、将軍として上毛野君（かみつけのきみ）の祖（おや）、荒田別（あらたわけ）、鹿我別（しかがわけ）兄弟を派遣し、百済の将軍と協力し新羅を攻めるのみか、気長足姫尊四十九年（249＝369）条（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#%E5%8D%85%E5%8D%81%E4%B9%9D%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%B8%89%E6%9C%88)）に、「比自炑（ひしほ）、南加羅（ありしひのから）、喙国（とくのくに）、安羅、多羅、卓淳（とくじゅん）、加羅七つの国を平定」したとある。これは、百済の近肖古王（在位；346-375）と王子の貴須（近仇首王、在位；375-384）の時のことであり、同五十二年（252＝372）条（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#%E4%BA%94%E5%8D%81%E4%BA%8C%E5%B9%B4%E7%A7%8B%E4%B9%9D%E6%9C%88)）に百済の久氐が千熊長彦に従ひ来朝し、近肖古王からの七枝刀一口・七子鏡一面、及び種種の重宝を献上するのであるが、刀の制作年は泰和四年（369年）であることからもこのことが知られる。
　広開土王碑によれば、百済、新羅は高句麗の属民であったが391年に倭の臣民となったと読める（これは高句麗が戦いの大義名分としたもので事実かどうか分からないともされる。広開土王碑の拓本、早乙女 雅博、[HP](https://www.l.u-tokyo.ac.jp/digitalarchive/collection/saotome_masahiro.html)）。「百殘（百済）、新羅は舊く是れ屬民、由りて來り朝貢す。而るに倭は以て辛卯年（391年）に來り、海を渡り百殘を破り，□に新羅を□して、以て臣民と為す」。これによれば、百済、新羅が倭に臣従するのは391年以降となるも、「紀」とは合致しない。
　誉田天皇（応神天皇）三年（272＝392）条（[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#%E4%B8%89%E5%B9%B4%E5%86%AC%E5%8D%81%E6%9C%88%EF%BC%88%E3%81%8B%E3%82%80%E3%81%AA%E3%81%A5%E3%81%8D%EF%BC%89%E8%BE%9B%E6%9C%AA)）に、「百済の辰斯王（しんしわう）が天皇に禮を失し、百済が王を殺し、阿花（あくゑ；阿莘）を立てて王（こきし）とした」とある。392年に広開土王（談德）は漢江（ハンガン）と臨津江(イムジンガン)が合流する地点の百済の關彌城(カンミジョウ）を20日間包囲して落としている。この百済の敗戦について、倭が辰斯王を詰問して起こったのが上記の事件の背景と推察できる。ただ、三国史記百済本紀（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/125)）では、辰斯王は八年（392）10月狗原で田（猟）すること旬（10日）経て返らず、11月狗原行宮で薨去、幼少の阿莘王の即位となったとあり、「紀」の記述を否定している。
　「記紀」が中国に朝貢したことを削除したごとく、不都合なことを打ち消すのが、三国史記を編纂した金富軾の立場でもある。しかし、その痕跡は残されている。訖解（きっかい）尼師今（にしきん）の三年（312）に、倭国が王子の花嫁を求めてきたので、阿飡（5等官）の急利の女（むすめ）を送った（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/20)）とあり、単なる求婚挿話ではあるまい。同三十六年（345）に倭国が書を以て交を絶ち、翌年金城を囲むに至るも、新羅は門を閉じ、倭軍の食糧尽きるのを待ち退却する所を急撃し敗走させたとある。奈忽（なこつ）尼師今の九年（364）に、倭軍が大挙して侵入した時には、吐含山に数千の人形兵を列し、勇士千人を斧峴（ふけん）に伏し、不意を打ち多くを殺したとある。新羅は、高句麗との関係を重視し、同三十七年（392）に伊飡（2等官）の大西知（おおにしち）の子実聖（じっせい）を質に送っている。翌年（393）に倭軍が5日間金城を囲むも籠城し、退却する所を襲い敗走させたとある。実聖は同四十六年（401）に帰国し、翌年奈忽王が薨去すると、王位に就くも、その年（402）に、倭と好（よしみ）を通じ、奈忽王の王子未斯欣（みしきん）を質としている。質を出すことは、「紀」では、先の微叱許智伐旱の件の如く臣従を意味するが、三国史記ではそのような素振りは見せない。
　広開土王碑では、「九年己亥（399）、百殘は誓を違へ倭と和通す。王は平穰に巡下し、而して新羅は使を遣し王に白（い）ひて云（いは）く、倭人が其の國境に滿（いは）み、城池を潰破し、奴客（新羅の家奴）を以て民と為す。王に歸し命を請ふ。…十年庚子（400）、（高句麗は）步騎五萬を教へ遣し、往きて新羅を救はしむ。男居城より新羅城に至る。倭は其の中に滿めり。官兵方（四方）に至り、倭賊は退く」とある。
　三国史記は広開土王碑の記述とも異なる。高句麗の故国壌（ここくじょう）王は百済からの侵入、遼東からの燕の侵入に対応するためであろう、九年（392）に新羅と修好（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/94)）とあり、新羅が実聖を質としたとあるが修好（親しく交わる）であり臣従関係とはしていない。広開土王元年（392）から四年（395）にかけて百済を攻撃し敗走させている。ただ、400年あたりでは、新羅を救援し倭を駆逐した記述はなく、広開土王碑は無視されており、もっぱら燕との戦いの記述となっている。
　それぞれが国史を編纂する上で、自国にとって好ましくない事象を削除し、改変をする。個々の立場をさておき、時代の流れの中でみることが必要かと思われる。

**使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公**
　中国本土では、魏の司馬氏は晋（西晋）を建てる（265年）も10年に亘る八王の乱（～316年）の後、北は五胡十六国、南は東晋の時代となった。半島では、東晋との関係維持を優先するも、五胡十六国を収束させる北魏の動向が新たな風を興していた。後燕の漢人を用い、部族民の合議制を廃して律令を導入し中央集権化を目指し、大學を建て子弟敎育をはじめ、多民族を統一するに仏教を用い、僧を厚遇し堂塔を建てた。この影響を受け、高句麗小獣王は二年（372）に仏像や経文を受け入れ、大学を建て、僧を招き、寺を建てた。これが実を結び始めたのが高句麗王談德（広開土王）の時代であり、長寿王（在位；413～491）の時には、元年に東晋に朝貢し、宋書によれば、「使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公」に除されている。
　使持節とは、皇帝から全権を委任されたことを示す「節」という旗状の器物を授けられたことを意味し、都督は軍政を統轄することであり、營州の軍事ならびに統治を委任された東晋の将軍であり、刺史（監察官、行政長官）に相当し、楽浪公ともされた高句麗の王となる。高句麗は、同二十三年（435）に北魏にも朝貢し、都督遼海諸軍事・征東将軍・領護東夷中郎将・遼東郡開国公・高句麗王に叙されており、高句麗は北魏との関係に重点を移しつつ、東晋とも関係を維持する政策をとった。
　漢文化、統治システムを導入し国家を整え、新たなシンボル仏像と寺院と僧（仏教）により民を統一せんとする動きが興っていた。これに最初に取り組んだのが古尓（こに）王の時代（234～286年）の百済であった。246年魏の毌丘倹（かんきゅうけん）が高句麗を討伐することで、半島が再び漢人の統治下に置かれたことによる。王は五年（238）正月に祖神ではなく天地を祭り（国立国会図書館、[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/121)）、十年（243）に大壇を設け天地山川を祭った。二十七年（260）には六佐平を導入し、各佐平に大・中・下の別を設けている。
　内臣佐平；宣納（王命伝達）　内頭佐平；庫蔵（財政）　内法佐平；儀礼（儀式）
　衛士佐平；宿衛兵（近衛兵）　朝廷佐平；刑獄（司法）　兵官佐平；外の兵馬（軍事）
また、官位に十六品を設け、
　一品　二　　三　　四　　五　　六　　七　　八　　九　　十　　十一　十二　十三　十四　十五　十六
　佐平　達率　恩率　徳率　扞率　奈率　将徳　施徳　固徳　季徳　対徳　文督　武督　佐軍　振武　克虞
　六品以上の服色は紫、銀花冠　　　　　十一品以上の服色は緋（鮮赤色）十二以下の服色は青
と体制を秩序づけ、王制を強化し、二十九年（262）には、官人で財を受けあるいは盗むはその三倍を徴収し終身禁固とすと布告しその徹底を図らんとしている。
　責稽（せきけい）王（286～298年）の時、高句麗と争う帯方の王女宝菓（ほうか；帯方太守の女「むすめ」）を夫人としており、帯方郡の要請により救援して高句麗と戦い、敵対関係は決定的となっている。これらの漢化政策が実を結び百済が高句麗を圧倒する力を有したのが近肖古王の時であり、二十四年（369）に雉壌（ちじょう）の戦いで高句麗二万の軍を撃破し、二十六年（371）に高句麗軍を浿水（ばいすい；臨津江か）に迎撃し破り、平壌に進軍し高句麗王が流れ矢で亡くなる事態となっている。そして翌年（372）正月に晋に朝貢し、晋書によれば「鎮東将軍領楽浪太守」に除されている。そして、「古記」によれば、近肖古王の時に、博士高興（こうこう）を得て書記（国書を記述すること）有りとし、また、枕流（ちんりゅう）王元年（384）に晋に朝貢し、僧の摩羅難陀（まらなんだ）を迎え入れ、翌年に仏寺を漢山に創建し、僧十人を得度（出家）させている。
　かく国力を蓄え、中国王朝の信任を得て、仏寺・僧を有することでその進取の気象を半島に誇示したのであろう。しかし、百済の軍事的膨張はあっけなく衰える。三国史記ではその原因は語られない。「紀」に推測すれば、それを支えていたのに倭軍があり、倭の事情によると思われる。

**半島における倭**
　半島に於ける倭の当時の行動は三国史記では読み取ることが困難である。「紀」によりその主張を見るも、中国の史書に照らし合わせぬと、はぐらかされることになる。
　気長足姫尊四十九年（249＝369）に、倭は葛城襲津彦を副え新羅に質を返還するも、計略にかかり奪還され、報復の為に新羅に将軍荒田別と鹿我別の軍を派遣した。百済の助言であろう、倭軍のみでは足りないと、百済軍に沙白（さはく）・蓋廬（かふろ）の軍士を加え、卓淳国経由で攻撃し、新羅を撃ち破り、上記七国を平定した（この七国を任那としたように思われる）。その勢いのまま、済州島を攻撃し百済に与えた。近肖古王と貴須が軍を率いてこれに合流すると、比利（ひり）、辟中（へちう）、布弥支（ほむき）、半古（はんこ）が百済に降伏した。これを近肖古王は大いに喜び、百済は西蕃として朝貢することを約したとある（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#%E5%8D%85%E5%8D%81%E4%B9%9D%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%B8%89%E6%9C%88)）。
　一方、葛城襲津彦に新羅を討たせたところ、新羅に美女二人を宛がわれ、逆に加羅を攻撃した。加羅王は妹を天皇（神功皇后ではない後の天皇；仁德天皇紀の六十七年（379）十月から八十七年（399）正月の記述は空白であり、この時期の半島での出来事が神功皇后・応神天皇の時代に編入されていよう）に直訴させ、天皇は百済の将軍木羅斤資（もくらこんし）を遣し（百済将軍を臣下とみなしている）、加羅を救援せしめた。新羅の美女というは垂涎の的であり、倭の王子の花嫁に新羅の女（むすめ）を求めた如きもので、倭の軍士とて同じ想いであったことにかわりあるまい。現地に子を設けることになり、後にその帰属をめぐって問題が起り、また、新羅のみならず現地に取り込まれる者も出、一筋縄ではゆかなくなる。
　さて、先に見た百済辰王の一件で派遣されたのは、紀角宿禰（きのつのすくね）・羽田矢代宿禰（はたのやしろのすくね）・石川宿禰（いしかはのすくね）・木菟宿禰（つくのすくね）であり、葛城襲津彦を含め、武内宿禰を祖とする葛城の勢力であった。葛城襲津彦の一件もさることながら、長く権勢を行使してきた武内宿禰に対する不満が政権内に渦巻いてきていた。筑紫は半島の勢力も触手を伸ばしてくる地であり、これを統治させるべく武内宿禰を筑紫に派遣したところ、その弟の甘美内宿禰（うましうちのすくね）が、兄が「独（ひとり）筑紫を裂（さ）きて、三韓（みつのからくに）を招（まね）きて己（おのれ）に朝（したが）はしめて、遂（つひ）に天下を有（たも）たむとす（誉田天皇；応神天皇九年「278＝398」、[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#%E4%B9%9D%E5%B9%B4%E5%A4%8F%E5%9B%9B%E6%9C%88%EF%BC%88%E3%81%86%E3%81%A5%E3%81%8D%EF%BC%89)）」と讒言する事件が起こった。
　天皇周辺のみの反武内宿禰の動きか、半島の勢力の工作があったものか、由々しき問題となった。結局、探湯（くがたち；熱湯に手を漬け潔白を定める）により武内宿禰の潔白が示されたが、疑念と動揺が拡大したことに変りは無い。これは、上毛野君の祖、荒田別の系統への傾斜を高めるものともなる。大鷦鷯天皇（仁德天皇）五十三年（365）には、上毛野君の祖、竹葉瀬（たかはせ）が精兵を授かり新羅問責の軍を率いている。後に、この東国の勢力により葛城の勢力が駆逐されることになる。
　また、誉田天皇二十八年（297＝417）に高句麗から使者が訪れ、上表に「高麗の王、日本国に教ふ」とあり、太子の菟道稚郎子（うぢのわきのいらつこ）が激怒したとあるが、「呉に遣して、縫工女を求めしむ」に百済ではなく高句麗に頼ることとなっていた。呉とは宋のことである。
　「阿知使主等、高麗国（こまのくに）に渡りて、呉に逹（いた）らむと欲（おも）ふ。則ち高麗（こま）に至れども、更（さら）に道路（みち）を知らず。道を知る者（ひと）を高麗に乞ふ。高麗の王（こきし）、乃（すなは）ち久礼波（くれは）・久礼志（くれし）、二人を副（そ）へて、導者（しるべ）とす。是（これ）に由りて、呉に通（いた）ること得たり。」
　416年には百済の直支王が東晋の安帝から「使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王」に除せられており、百済ルートでないことに首をひねりたくなる。大鷦鷯天皇（仁德天皇）十二年（324）に、高句麗が「鉄（くろがね）の盾、鉄の的（まと）を貢（たてまつ）る」とある。高句麗では、王陵から４世紀代の鎧甲、冑、頸甲、馬甲、馬冑が出土しており、鉄は武具のみならず、農具、運搬用の引き車の車輪にも用いられていた。薄い鉄を車輪に巻き付ける技術があり、木製の盾に貼り付けることもできた。鉄片を革紐で綴る甲冑から鋲で留める甲冑が制作され、馬上で操作が容易となる槍、弓矢も開発され、半島での戦いも変貌しており、日本（やまと）はその対策や技術の導入を求めたのであろう。
　宋書卷九十七、列傳第五十七、夷蠻伝・倭国（宋書、倭国伝）によれば、「倭国は高驪の東南大海の中に在り、世々貢職を修む。高祖の永初二年（421年）、詔していはく、『倭讚、萬里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらは）すべく、除授を賜ふべし』と。太祖の元嘉二年（425年）、讚、また司馬曹達を遣はして表を奉り、方物を献ず（岩波文庫）」とある。
　宋の劉裕が東晋恭帝を立て、宋王に上ったが、禅譲を受けて宋国皇帝に就くのを見るや否や、讃は建康に朝貢している（421年）。武帝（劉裕）の三男、太祖、文帝（劉義隆）の時（425年）には、司馬曹達を派遣して求めたものがあった。425年に、倭王珍は「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」を求め、安東将軍、倭国王に除せられている。中国の史書からすれば、当時、高句麗を除く朝鮮半島は百済・新羅・任那・秦韓・慕韓の五国が存在していたとする認識である。辰韓とはかつて秦から逃れてきた漢人に馬韓が東部に入植させた地で、小白山南麓の奉化、栄州、安東及び東海岸の江陵から蔚珍あたりであるが新羅となった地で秦韓は新羅に属さない地となろうか、慕韓は栄山江流域あたり、馬韓の南部分とみることができやう。秦韓・慕韓の間に任那があり、讃・珍は任那を足掛かりにして、百済・新羅・秦韓・慕韓に対する、東を安んず将軍、倭国王の承認を求めていたことになる。倭がそれほどの経済力を有していることは、仁徳天皇陵が建設されていたことが物語っていよう。

**陳寿と沈約**
　中国にあっては、漢の武帝が衛氏朝鮮を平定し郡県制を導入して以来、半島及び列島に関する情報が整備されるようになった。それまでの史家は尚書（詩・書）、春秋左氏伝・公羊伝・穀梁伝、史記（司馬遷）、漢書などに倣い各国の王や諸侯中心の史書を編纂するのが通例で、地理誌で周辺国の事情が記されるのみであったが、インド、太秦（ローマ）に至る西域の地誌を著した班固が新たなジャンルを開拓していた。魏で王沈（おうしん）等の魏書（44巻）、呉で韋昭（いしょう）等の呉書（55巻で未完）が編纂されるようになり、国書でない私家の史書も編纂され、魚豢（ぎょかん）の魏略では倭国に言及され、郭義恭（かくぎきょう）の博物誌、「広志」では蕃夷部に倭國条が設けられた。東夷伝のなかで、更に詳しく倭人伝を編纂したのは、蜀で巴や蜀の伝を編纂していた陳寿であった。
　蜀の史家が半島や列島の事情を記すという廻り合わせである。陳寿の父は馬謖に参軍しており連坐、陳寿も白眼視され任官もならなかった。諸葛孔明の死後、劉禅に魏への降服を勧め、晋になって、散騎常侍（皇帝の側近として勅書の伝達をする係）に任命された譙周（しょうしゅう）の高弟であったことで道が開けた。司馬炎（武帝）は呉を分断するには、蜀の安定を図ることを重要とし、その優秀な高官を採用した。譙周は病もあり出仕せず亡くなり、門人の高弟の文立が散騎常侍に就任する。
　文立により同じく門人であった陳寿が推挙されたとも、司空の張華が彼の史才を知り、孝廉（こうれん；秀才と並ぶ郷・里での推挙制度、父母への孝順及び物事に対する廉正な態度の人物）で推挙され、佐著作郎（著作を補佐する、修史官）に任じられたともされる。そして、中書監（中書令の首席秘書官）の荀勗（勖）（じゅんきょく）､中書令（皇帝の詔勅を起草する機関）の和嶠（かきょう）の求めにより、陳寿は諸葛孔明集を撰し、これが認められ著作郎ともなる。
　咸熙二年（265）武帝に呉への出兵の上表がなされると、荀勗・買充等主力は出兵に反対し、杜預将軍（「春秋左氏伝」の注釈者）と張華が賛成に回り、両者は対立した。武帝が咸寧五年（279）出兵を開始すると、その対立は深刻となった。晋軍が翌年呉を滅ぼすと、陳寿は魏呉蜀の三国志の編纂を命ぜられ、著作郎として高い評価を得ることになった。
　しかしながら宮廷内での対立は激化したようで、司馬炎の武帝即位により中書令に任じられた張華は幽州（北京）へ持節・都督幽州諸軍事・領護烏桓校尉・安北将軍（282～287年）として左遷され、張華ともども出兵を支持していた陳寿の中書郎推挙も沙汰止みとなり、陳寿も長広太守に左遷され、母の病気を理由に任を離れることになった。しかし、対呉戦で功のあった杜預将軍に推挙され返り咲き御史治書に任じられた。
　反骨の苦労を嘗め、元来地方の伝の編纂に意欲があった陳寿は、地方との交渉の記録を参照することが出来る立場に居り、魏志倭人伝では、卑弥呼の政権との交渉に関する記録を引用することもできた。また、半島の情報を得るには張華の存在が欠かせなかったでしょう。張華は朝鮮半島の経略に力を入れ、辺境の二十余国までもが始めて朝貢してくるという成果をあげたという。彼は400巻（武帝の命で10巻に縮小）からなる「博物誌」を著わしたとされ、辺境の地理や風俗など陳寿が利用できるものもあったと推測される。
　倭人伝では、倭は魏の東南、半島の南の海中にあり、卑弥呼の女王国はその北に一大率を置き諸国を検察せしめているとみており、そのまま南に延びた列島を想定していよう。一大率は伊都国に居り、国中に刺史の如きがあり、統率している。女王は、洛陽、帯方郡、諸韓国に使者を送り、それらから使者があれば、一大率において、対応し文書や賜物を確認照合したうえで卑弥呼に送り判断を仰いだとみられていた。

卑弥呼は「鬼道に事（つか）え、能（よ）く人を惑わす」と記されシャーマン（巫女）とみられているが、半島の政治・軍事情勢に通じ「親魏倭王」に除される外交成果を挙げており（魏志倭人伝[その3](../%E5%B2%A9%E5%80%89%E7%B4%99%E8%8A%9D%E5%B1%85/koten/gishi3.htm)）、その外交センスに留意すべきである。また、陳寿の志なかりせば、「紀」にその痕跡を留めることすらなく、卑弥呼の存在すら永久に知られることがなかったかもしれません。

　倭の五王に関しても沈約（しんやく）なかりせば、彼等が半島において何を求めていたかを知ることは出来かねたでしょう。沈約は、地が卑湿で、水害多発地帯であった呉の呉興（ごこう）の人。沈氏は尚書、軍事に携わる家系であり、祖父が劉裕（後の武帝）の軍に加わり功を挙げ、鎮西将軍府中兵参軍、建威将軍・河東太守に任じられた軍人であり、同時に詩・賦・賛・三言・箴・祭文・楽府・表・牋・書記・白事・啓事・論・『老子』一百二十一首を著述した文人でもあった。伯父は文帝（劉義隆）の宮中に入り、悪政もあったが、寧朔将軍・安成相にあった時には、孤児や老人を救済し、農業を奨励し功を挙げ、祖父同様一百八十九首を著はした文人であった。父は、文帝に見込まれ、揚州主簿（文書、簿籍、及び印鑑を主管し、一些の文件を起草する）に就いていたが、皇太子劉劭（りゅうしょう）により文帝が殺された際、嘆き身体を壊し劉駿（りゅうしゅん；孝武帝）に参陣できず、讒訴され処刑されている。沈約は子供のころから、宋の建国の経緯を聞き及び、政変の真っ只中に暮らしていた。
　宋では元嘉十六年（439年）著作郎、何承天（かしょうてん）が宋書の編纂を開始したが、引き継いだ山謙之（さんけんし）が病死、蘇寶生（そほうしょう）が反乱に加担し誅され、徐爰（じょかん）が義煕元年(405年) から大明八年(464年〉まで纏めあげていたが、政変で編纂方針も揺らぎ、一貫したものではなかったという。
　沈約は泰始初（465年）、24歳頃に、後に征西將軍となる蔡興宗（さいきょうそう）を通じて、宋の明帝より晋史編纂の勅許を得たものの、未完に終わるが、晋から宋に至る資料を収集していた。また、武帝の第二子の蕭子良（しょうしりょう；竟陵王）の竟陵八友の一人であり、詩の韻律に秀で、中国語の四声（平、上、去、入）を体系立てた文人でもあり、斉の武帝（蕭賾：しょうさく）永明五年（487年：46歳頃）に、勅命を得て宋書編纂に携わっている。翌年に上表しており、それまでの蓄積もあり、何を省き何を採用するかを固めていたのでしょう。
　宋書、列伝の第五十七、夷蛮、53倭國（中國哲學書電子化計劃、[HP](https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=474169)）によれば、倭の賛は高祖永初二年（421年）修貢し除授を求め、元嘉二年（425年）に司馬曹達を派遣したものの亡くなり、弟の珍が使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王を自稱して除正を求め、安東將軍、倭國王を除され、更に、十三人を平西、征虜、冠軍、輔國將軍に聴（ゆる）されている。二十年（443年）に済も安東將軍、倭國王とされ、二十八年には、念願の使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事，安東將軍、併せて二十三人を軍、郡に除されたものの済は亡くなった。世祖大明六年（462年）には、興が後継となり、安東將軍、倭國王を授かったが亡くなり、弟武は使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王を自称し、順帝升明二年（478年）、使を派遣してこういう風に述べたとある。
　我が祖等は甲冑を纏い山野を駆け巡り、東に55国、西に66国、海を渡り95国に王道により国を安泰にした。天朝に朝貢する道を確保しようとするも百済を経ると高句麗がこれを阻止する、我が父の済はこれを討つに兵を挙げたが、父と兄を喪った。この志を継ぎ、これを討つに開府儀同三司（幕府を開き幕僚を置くことができる権限）を賜れば幕僚を置き忠勤す、と申し出ると、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王に除された。
　百済、加羅の状況によって六国に差異があり、一様ではないが、卑弥呼が魏と結び半島での権益を擁護したごとく、倭の五王もそれを視野に入れて半島での権益を擁護せんとして、晋や宋との関係を求めていたと思われる。推古朝以降は対等に立たんとする意向が生れ、天智朝での白村江での手痛い敗戦以降には、中国王朝に朝貢をしたことを臣従の証とされることを恐れるようになり、天武朝以降では「記紀」の編纂から、その点が分からないような記述となった。また、三国史記では、三国が倭に従属したような中国王朝の記録にも、「紀」の記述にも距離を置いた。沈約の記述なくば、倭の五王が何を求めて朝貢したかを知る事はできなかったことであろう。
　共産中国の政権は明の時代に台湾が明に属した故に中国に属するとする。後漢、魏、晋、宋の時に王に任じた（臣下の）倭（日本）は中国王朝の封じた国である、米国と結託するなどは筋違いの振る舞いとする。これは、プーチン大統領がベラルーシもウクライナもロシアの兄弟（臣下）というようなもので、病は遠く時を経ても再発するようである。

**男大迹天皇**（継体天皇；在位507～532）**の半島政策**
　我国に於ける史書の編纂については、通例、推古朝二十八年(620年）是歳条の「皇太子、嶋大臣、共に議りて、天皇記及び國記、臣連伴造國造百八十部幷て公民等の本記を録す」とあるを始まりとするも、蘇我蝦夷が討たれる際に焼いたとある。持ち出されたものがあるとされ、また、古代には口伝の風があり、「記紀」の編纂に利用されていようが、その記録の実体は不明である。「紀」においては、去來穗別天皇（履中天皇）四年（403）秋八月条に、「始めて之（これ）諸国（くにぐに）に国史（ふみひと）を置く。言事（ことわざ）を記（しる）して、四方（よも）の志（ふみ）を達（いた）す」とあり、この時代に、諸国において国史が置かれているならば、中央においては渡来の博士（漢人）の助力を得て対外的に用いられるものが作成されていて不思議はない。
　倭の五王が中国王朝に朝貢をし、使持節、都督、将軍、王の叙任を求む以上、上表が必要となる。国の成り立ちを明かにし、その権限を求むに相応しい王であり、中国王朝にとって任ずべき所以のあることを印象付けることができねばならない。一方王朝側は、それを審査し、他に上表をなす周辺国との関連を考慮し、叙任する所以があるかを判断することになる。従って、その叙任にはそれを反映する現実認識があったことにもなる。
　任那の存在を否定する論議は、広開土王や沈約にあなた方は無い現実を記した、と決めつけるがごときで、彼等は唖然としよう。「紀」に記されていることも、後の見解で修飾や改変が付加されているのであろうが、無かった現実を記した訳ではあるまい。
　男大迹天皇（継体天皇）以前の半島政策は、所謂「倭の五王」の時代のものであった。雄略天皇以前には武内宿禰の子孫、葛城の勢力が主導していた。雄略天皇により葛城の勢力が討たれたことには、半島に於ける葛城の勢力の行状に対する批判も関係していようが、半島における倭の立場を揺るがしたことであろう。倭側の変動は続き、それまでの政権から遠かった男大迹天皇の即位は、任那の運営に混乱をもたらした。その経緯を辿っておこう。

***任那と加羅　百済との対応***
　任那をめぐる「紀」の記述は、干支二運(120年)を溯って始められており、気長足姫尊四十九年（249＝369）に平定したとする「比自炑、南加羅、喙国、安羅、多羅、卓淳、加羅の七国」をその始まりとしていよう。高句麗広開土王十年（400）に、「歩騎五萬を教遣し、住きて新羅を救ふ。從男居城、新羅城に至る。倭其の中に滿ち、官軍、方に至りて、倭賊退く。倭の背より急追し、任那、加羅に至り從伐城」とあり、倭が敗退した時に任那が加羅に至っている。これは、高句麗が、①倭軍と任那軍を別とし、②任那が任那内の加羅に至るともとれるが、任那と加羅を別とする認識となろう。「紀」では、気長政権が加羅を含めた七国をすでに平定したとしており、高句麗側の認識とは異なっていよう。誉田天皇（応神天皇）九年（276＝396）条に「高麗人、百済人、任那人、新羅人、並に来朝り。時に武内宿禰に命して、諸の韓人等を領ゐて池を作らしむ。因りて、池を名けて韓人池と号ふ」とあり、任那と加羅を別とはしていない。
　任那は洛東江に合流する川によって区切られる地域が個別に国を形成したのであろう、水上交易では結びついており、元来はそれぞれが百済、新羅、倭と個別に対応することができ、統一支配する政権がない地であった。同二十五年（294＝416）条（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#%E5%BB%BF%E4%BA%94%E5%B9%B4)）には百済記を引いて、百済の木満致（もくまんち）が日本（やまと）に来訪し応神政権で「制」を承けたものの、任那に入り浸り悪政を行うを天皇が召喚したとある。木満致は七国平定に助力した百済の将軍木羅斤資（もくらこんし）が美女で名高い新羅の女（むすめ）との子であり、任那に対しては百済も影響力を行使しようとしていた。百済人のみならず倭人も新羅の美女を求め、現地の女性との間に子をなし、任那内では親倭、親百済、親新羅などと利害関係が錯綜する状況を生んでいた。
　その後、「紀」では、任那には一切言及されることがなくなる。倭の賛、珍、済、興等が使持節、都督、将軍、王の叙任を求めた時に当る。中国王朝は、百済、任那、加羅については、賛、珍、済の時には、倭が百済、加羅を含めた任那等六国に支配権を及ぼしていると自称するも、珍には13人に将軍を認めたものの、安東将軍、倭王としたに過ぎなかった。済は451年には、百済を外し、加羅と任那を別国として秦韓、慕韓、新羅を含め上表するも、中国王朝は安東将軍のまま23人に軍と郡に関する官を認めるに留めていた。しかし、武の時には、百済を含め七国で上表し、百済を除き、使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王を認めた。
　任那の枠組みでは洛東江の海口に位置し海上交易を旨とし、倭とも交易する金官を中心としてきた諸国と、洛東江中流で新羅と百済の狭間にある加羅を中心とする諸国では対応すべき相手も利害も異なり同一視することはできない。百済は任那方面では新羅と対立するも、高句麗、靺鞨の南下に対しては新羅と協調する。
***任那の混乱　高句麗との対応***
　大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）七年是歳（463）条（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#%E4%B8%83%E5%B9%B4%E7%A7%8B%E4%B8%83%E6%9C%88)）で、吉備上道臣田狭（たさ）を任那国司（みまなのくにのみこともち）としたとあり、国司は大化改新以降の職名であり当時は別の名称であったと思われるが、「みこともち（天皇の命を受けて土地の政治を司る者）」であったことには変りがないでしょう、これを任命しているのは、宋書からしても不具合はない。ただこれは天皇が田狭の婦を横取りするための任命であり、田狭は当然これを恨んだ。時に新羅が従わず討つということで田狭の子（弟君）を新羅に派遣するが（田狭の任那を外して、百済経由であり、軍事的には不可解）、どういうことか弟君は新羅の近辺で進軍を止めた。田狭は任那より弟君に自分と同じ運命を辿らぬように倭に還らず百済に止まれ、自分も任那にとどまると伝えた。反乱の兆候である。しかし、弟君の妻が弟君を殺しそれを止めたという。
　八年（464）には、新羅は高句麗と修好し、高句麗の援軍を得るが、これを高句麗が新羅を襲う謀略とする噂が広がり高句麗兵士を殺したことにより高句麗との戦いとなり、新羅は任那の「日本府（やまとのみこともち）の行軍元帥等（いくさのきみたち）」の救援を請う事態となった。任那の王（訓がない、任那人であれば「こきし」、如何なる意味で王かは記されていない）、膳臣（かしはでのおみ）斑鳩（いかるが）が新羅を救援したとある。斑鳩の独断であるのか、天皇の命を得たものかは記されていない。
　翌九年には、天皇自ら新羅を討たんとして神に戒められ、紀小弓宿禰・蘇我韓子宿禰・大伴談連・小鹿火宿禰等が派遣されており、斑鳩による新羅救援は天皇の命ではあるまい。しかし、大伴談連及び紀岡前来目連が戦死、紀小弓宿禰は病死、新羅に向かった紀小弓宿禰の子紀大磐宿禰が小鹿火宿禰の指揮権を剥奪し、小鹿火宿禰は蘇我韓子宿禰に同様の危惧を伝え、軍内に溝が深まった。そこを百済が突き、蘇我韓子宿禰に紀大磐宿禰を討つ機会を設けるも、逆に蘇我韓子宿禰が討たれる結果となる。倭軍は分断され、新羅との戦は惨敗に終わった。三国史記によれば、この時百済と新羅は高句麗の南下を食い止めるために協力関係を築いており、任那は百済と新羅による切り崩しを受けていたようにみえる。
　八年には呉（宋）に国史を編纂する史部（ふみべ）の身狹村主靑（むさのすぐりあを）・檜隈民使博德（ひのくまのたみのつかひはかとこ）等を送り、十年（466）に帰国したとある。宋書の倭王の興、武の時に当る。彼等が上表したことが武の上表に反映されていようが、「紀」では一切触れられていない。十一年条では、百済から逃げて来た貴信（くゐしん）が呉（宋）の人で、琴弾（ことひき）の祖となったとあり、半島における軍事に関する言及は一切無く、半島経由ではなく直接宋から文化や手工技術を導入せんとする記述となっている。

　二十一年条（477；[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki32.htm#%E5%BB%BF%E4%B8%80%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%B8%89%E6%9C%88)）に、百済が高句麗に破れたため、百済に久麻那利（こむなり）を与え、久麻那利は、任那国の下哆呼唎県（あろしたこりのこほり）の別邑（わかれのむら）とある。蓋鹵王が亡くなり漢城を陥れられた百済は熊津に移るのであるが、蓋鹵王の後継については、百済記、日本旧記に基づく「紀」と三国史記では全く異なる。三国史記では久麻那利譲渡や日本（やまと）に居た崑支の子（末多王）を東城王として筑紫国の軍士、五百人を与へ百済に送り還したなどという「紀」の記述を否定するものとなっている。
　この状況からして久麻那利を熊津に近い所とみる説があるが、それでは任那の範囲が錦江上流に及び、慕韓をも浸食していることになり、想定に無理があるため、任那と切り離して考えられるようである。任那内に留める説では、熊川方面とみ東城王が上陸し拠点とする地とも考えられるが、「紀」自体で旧記が久麻那利を末多王に与えたのを誤りと記しており、これも成立せず、理解に苦しむ所である。

　雄略朝はこの時、新羅に対しても、高句麗に対しても、百済を救援する立場にありながら、有効な手立てを図ることが出来なかった。それは元来半島に進出した葛城の勢力を討ち、更に吉備の勢力を混迷させたことによろう。加えて、任那に駐留した倭や百済の将軍や兵士と任那、新羅の婦人との婚姻、私生児の増加によりその関係が複雑化してきており、仁徳天皇以降本国の政権交代も激しく、百済、新羅からの切り崩しを受け易くなっていたこともあろう。
　ここでは任那の範囲がかつての七国を越え 蟾津江や栄山江の流域の拡大している。その経緯には全く触れられておらず、この時期高句麗がその北方まで南下しており、如何なる軍事バランスの中で男大迹天皇（継体政権）が対応しているのかが判然としない。

***上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁四県の譲渡***

　この状況を更に複雑にしたのが弘計天皇（顯宗天皇）三年是歳条（487；[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki33.htm#%E4%B8%89%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%BA%8C%E6%9C%88)）であった。紀生磐宿禰（きのおひはのすくね）が高句麗と通じ、三韓（馬韓、弁韓、辰韓であるが、ここでは百済、慕韓、任那、秦韓、新羅）に王たらんとしたとある。どうやら任那の左魯（さる）、那奇他甲背等（なかたかふはいら）に操られていたようである。左魯は左魯麻都の系図の人で任那を牛耳り高句麗、新羅に通じていたとされ、那奇他甲背は奸偽（かだみいつはり）を懐き誘説（わかつりとく）人物と記されている（欽明紀五年二月条；[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki37.htm#%E4%BA%94%E5%B9%B4%E6%98%A5%E6%AD%A3%E6%9C%88)）。左魯と那奇他甲背等は百済の爾林（にりむ）を陥れ、激怒した百済により、左魯と那奇他甲背等が討たれている。
　しかし、高句麗との関係改善は進行していた。億計天皇（仁賢天皇）六年（493；[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki33.htm#%E5%85%AD%E5%B9%B4%E7%A7%8B%E4%B9%9D%E6%9C%88%EF%BC%88%E3%81%AA%E3%81%8C%E3%81%A5%E3%81%8D%EF%BC%89)）に、日鷹吉士を高句麗に派遣し、高句麗の皮加工の熟練の巧手者を連れ帰っており、高い鉄技術とともに馬具や馬車の車輪制作技術等の導入を図っていた。日鷹吉士がみたものは、それのみではなかったろう、高句麗が強大となった北魏を通じての漢化、仏教化の現状に圧倒され、報告していたことであろう。

　男大迹天皇（継体天皇）三年条（509；[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#%E4%B8%89%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%BA%8C%E6%9C%88%EF%BC%88%E3%81%8D%E3%81%95%E3%82%89%E3%81%8E%EF%BC%89)）に、任那日本県邑（みまなのやまとのあがたむら）には百済から逃れて来た者があり、その三・四世を百済に戻したとある（県「あがた」は元来、天皇直轄地を意味した）。百済では武寧王の時となる。百済は高句麗、靺鞨に攻められており防衛のため、遊民の帰農を求めていたとみられる。このあたりは「紀」と三国史記では全く異なり、その前提をみておく必要がある。
　蓋鹵王（かふろわう）の弟崑支（こんし）を日本（やまと）に送る際、蓋鹵王の子を孕んだ婦を授け、筑紫の各羅嶋（かからのしま）で産んだ児を嶋君とし、百済に送り還されたのが武寧王（むねいわう）、蓋鹵王の死により百済に還したのが崑支（東城王）であるが、暴虐となった東城王（崑支）を百済の国人が殺し、嶋君を王としたというのが「紀」であり、武寧王に対するシンパシーがみられる。
　三国史記（国立国会図書館；[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/130)）では、東城王（牟大）は崑支（崑支と倭とは無関係）ではなくその子としており、恨みにより臣下が人を使って東城王を刺傷させたとしている。その東城王（牟大）の第二子を武寧王（斯摩；しま）としており、系図的にも、即位の経緯も「紀」を否定している。三国史記では、東城王、武寧王の時には高句麗、靺鞨に対応するために、新羅と結び、南斉、梁に朝貢し、521年に武寧王は、梁より、使持節・都督・百済諸軍事・寧東大将軍を授かったとし、倭（やまと）とは一線を画している。
　三国史記には全く言及されないが、継体天皇六年条（512）に、百済は使者を派遣し、任那国の上哆唎（おこしたり）、下哆唎（あろしたり）、娑陀（さだ）、牟婁（むろ）の四県（よつのこほり；[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）を請うた。哆唎国守（たりのくにのみこともち）穗積臣押山（ほづみのおみおしやま）は、その維持が困難とみて百済に任せるが次善の策であるが、それもいつまで持つか分からないと判断していたようである。政権中枢にあった大伴大連金村（おほとものおほむらじかなむら）、物部大連麁鹿火（もののべのおほむらじあらかひ）等も同様の見方をしていたようで、記されてはいないが、継体天皇の意向でもあったのでしょう。しかし、これは気長足姫尊、誉田天皇（応神天皇）、武内宿禰以来の功績、天勅（神意）に背くものとして、反対する者も多く、物部大連麁鹿火の妻も夫を堅く戒め、太子の大兄皇子（おほえのみこ）は日鷹吉士を百済の使者の下に遣わし阻止しようとしたが、使者に「天皇の勅が重い」と拒否された。結果、大伴大連と穗積臣が百済の賄を受けているとの噂が流されたという。
　七年（513）六月に、百済は、返礼として五経博士を送る一方、娑陀の北の伴跛国（はへのくに）が百済の己汶（こもん)を掠奪したのを返還してもらいたいと請うてきた。十一月、己汶と娑陀を百済に与えると伴跛国が返還を求めて使者を立てたが、これを聞き入れなかったとある。この辺りまで高句麗が攻め込んでおり、百済・新羅・秦韓・任那間の係争地となっており、地元の小国も勢力を保っているようでもあり、従属関係は判然とせず、継体政権独自でこの譲渡を仕切ることが出来たとは思い難い。しかし、このことから事が大きくなった。翌年に伴跛国は継体政権との戦に備え周辺に城を築き、防備を重ね、新羅をも攻め（新羅まで攻めるとは高句麗や靺鞨の助力でも得ていたのか？）周辺でも掠奪を行ったという。継体政権は舟師五百により物部連を派遣したが、伴跛の兵士に裸で軍営にもぐり込まれ掠奪焼き討ちにあい百済へ避難している。十年（516）には、百済のみならず高句麗から使者が訪れ好（よしび）を結ぶとあり、外交上の駆け引きがどうなっているかが判然としない。どうやら、継体政権は新羅を除き他国とは修好を保とうとしたようである。

　「紀」では二十一年（527）まで武寧王が薨（みう）せ、百済は聖明王の時代となったことを記すのみである。新羅の法興王(在位514-540)は兵部を設置し、官位制度を整へ、百済との関係を改善し梁へ入貢し、九年（522）伽耶国王の花嫁の求めに応じ婚姻関係を結び、十一年（524）には伽耶国王と会盟している（この伽耶は高霊加耶を中心とした大加耶、加羅のことで、金海地域の金官加耶を中心とする任那とは別）。十五年以降仏教を取り入れ、十九年（532）に金官国王の求めに応じ、新羅の食邑（封地）として与え、位上等を授け、金官を取り込んでいた（国立国会図書館；[HP](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/27)）。

***磐井の乱***

　「紀」では二十一年条（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#%E5%BB%BF%E4%B8%80%E5%B9%B4%E5%A4%8F%E5%85%AD%E6%9C%88)）で、南加羅と喙己呑を新羅に奪われたとある。取り返すために近江毛野臣（あふみのけなのおみ）六万の軍を任那に派遣しようとした。かねてから継体政権に不満を抱いてきた筑紫国造の磐井が半島での政権の劣勢を注視し密かに反逆を策していた。是を察知していた新羅は磐井に貨賂（まひなひ）し、磐井は火（ひのくに）豊（とよのくに）二国を押さえ、高句麗・百済・新羅・任那の航路を遮断し、近江毛野臣の軍を足止めし、近江毛野臣を罵倒するに至った。このことからすれば、継体政権は哆唎、娑陀、牟婁、己汶の維持に窮しており、法興王の新羅が百済と協調し共に高句麗のみか倭とも対峙する構図となっていた。継体政権はその百済を通じ事態の改善を図ろうとしていた。太平洋戦争末期において中立・不可侵条約を締結していたソ連の仲介により和平を探り、逆に、満州、樺太、千島列島から北方四島まで侵略された日本政府の対応を想起せしめる。半島情勢の見える筑紫の磐井にはその様がみえており、新羅の国力の強化も十分に計算に入れていたことであろう。しかし、新羅は磐井を救援すべく任那を攻撃することもなく、倭内の争乱による半島への介入を阻止すれば十分とみていたのであろう。磐井は新羅の本格的な支援を引き込むことには失敗したようである。物部大連麁鹿火を主とし、大伴大連金村等の軍により乱は鎮圧された。
　この乱により半島では新たな動きが起こっていた。二十三年（529，[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#%E5%BB%BF%E4%B8%89%E5%B9%B4%E6%98%A5%E4%B8%89%E6%9C%88)）蟾津江の河口の多沙津（帯沙港）が争点となった。この港は加羅が用いていたのであるが、百済（扶余；錦江流域に移った百済）がこれを求め継体政権はこれを扶余に与えたため、加羅はこれを恨み、新羅と婚姻関係を結んだ。新羅が女（むすめ）と百人の従者に新羅の衣冠を着用させたことを加羅が怒り恥じたはずの新羅が児までなした女を戻そうとし、加羅はこれを拒否し、八城を抜いたとあり、一筋縄ではなかったようである。継体政権は磐井の乱により事態の深刻さを認識したとみえ、近江毛野臣を安羅に派遣し、南加羅と喙己呑を奪還し、高堂を建て、百済と新羅の使者を呼びつけ天皇の詔勅を聴かせた。ただ、百済の将軍を堂にあげなかったことを、将軍等は恨んだともある。

　同年夏に、任那の王（こきし）己能末多干岐（このまたかんき）が来朝し、新羅に国境を侵されており救援を求めた。干岐というは、小国の王号で任那のどの国かが不明と注されており、任那全体の王ではない。以下からすれば532年に新羅に併合された金官国となろうか。政権は任那に在った近江毛野臣に調停を命じた。近江毛野臣が洛東江河口の熊川に新羅王と百済王を召喚しようとしたが、来訪したのは下位の使者のみであり、怒り、天皇の勅を告げるに値せずと追い返すと、新羅は三千人の兵を引き連れた上臣(大臣)伊叱夫禮智干岐（しぶれちかんき）を派遣してきた。近江毛野臣は熊川の城に閉じこもり、三月に亘り上臣にも勅を告げるを拒み、上臣は近辺の四つの村を掠奪して引き上げた。
　翌年には日本(やまと)人と任那人の混血児の帰属に関する訴訟（あらがふこと）が多発し、定め難い事態となり、近江毛野臣は楽（この）みて誓湯（熱湯）に投じ爛（ただ）れぬ者を実（まこと）としたため、爛れ死ぬ者が多くなり、不穏な情勢となり、政権は毛野臣傔人（ともなるひと）河内馬飼首（かふちのうまかひのおびと）御狩（みかり）を呼び戻し実情を聴取した。政権は、調吉士（つきのきし）を派遣し実体を確認させたが、毛野臣は調吉士に城を守らせ帰還させなかった。

　任那王は毛野臣に帰国を薦めたが聞かぬことに意を決し、新羅と百済の双方に兵を派遣することを要請した。百済軍は背評（へこほり）で毛野臣軍を破り、新羅と共に城を包囲し、毛野臣は籠城し、毛野臣を差出すことのできない任那王を罵倒し、一月包囲したままで連合軍は周辺の五城を抜いて引き上げた。調吉士は帰朝して実情を告げ、毛野臣は召喚され帰る途上対馬で病死した。政権二十四年（530）のことであり、三国史記の法興王十九年（532）の金官併合とほぼ合致する。

　男大迹天皇（継体天皇）の即位は、国内的には天皇制が途絶える危機を回避することが出来たものの、北陸、琵琶湖の東部から尾張、岐阜方面、琵琶湖の西部から淀川水系の茨田に至る勢力を糾合していた大王を即位させたことは、この水系の馬飼や渡来系手工業者の経済力を背景にする新興勢力であり、それまで中央で政権を支えてきた豪族にとっては伝統をわきまえぬ勢力となったであろう。また、かつて百済を強力に支えた倭軍の半島におけるプレゼンスが揺らいでいたところを失速させるものとなった。
　仁徳天皇までは武内宿爾及びその子孫を中心とする葛城の勢力が主流となり、東国の荒田別や西国の吉備、中央の和邇、筑紫の安曇などが統御されていたようであるが、駐留が長期化するにつけ、葛城襲津彦以来半島内では中央と異なる百済や新羅との対応が生じてきた。履中天皇以降は後継者争いが起こり、大阪と奈良の間で政権争奪が起った。雄略天皇が皇位継承該当者を次々と討ち即位し、葛城の勢力を打倒したことは、半島での倭軍の動揺を招いたであろう。毛野の勢力に重心が移るも雄略天皇が吉備の勢力を分断したことで事態を混沌とさせた。継体天皇の時には大伴氏や物部氏が中央で力を有すも、半島では毛野の勢力が規律を失い、任那諸国は継体政権が百済に譲渡を進めたことを恨み、新羅と関係を改善しようとし、新羅、百済双方からの草刈場となったようである。それを再編しなくてはならなくなったのが欽明政権であろうが、物部氏と蘇我氏の対立を生むことともなる。

了2023.09.21